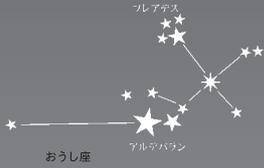


ポラリスを仰ぐ北の大地から



赤平市の医療

赤平市医師会 会長 赤川 清介

赤平市は、昭和43年8月空知医師会から分離独立し、医師会員数48名で発足しています。

当時は石炭の町として栄え人口は6万人に近く、病院数も市立病院、炭鉱病院など4施設と診療所が16施設あり、赤平市の医療を支えてきました。

その後、日本のエネルギー政策の変革により炭鉱の閉山が相次ぎ、人口の減少と開業医の高齢化のため閉院が続きました。現在では人口が1万2千人を切り、病院は市立赤平総合病院と精神科主体の平岸病院の2施設と内科診療所が1施設に激減し、医師会員数も28名となっています。

その中で市立赤平総合病院が中心となり近隣の砂川市立病院、滝川市立病院に協力をいただきながら赤平市の医療を支えています。

また、市立赤平総合病院入院棟の老朽化が進み、現在新築中です。来年の4月には完成の予定です。

地方の病院は医師不足、看護師不足に悩まされていますが、市立赤平総合病院も同様で固定医が8名しかいなく、医師不足が深刻な問題となっています。

その中で毎年2名の研修医が道外から来てくれており、大きな戦力となっております。

今年は東京大学と産業医科大学より2名の研修医が来て来ています。

最後になりますが、大学病院から地方の基幹病院に医師派遣ができる体制を願って稿を終えたいと思います。



極東ロシア訪問と領土問題

北海道大学医師会 会長 寶金 清博

北海道大学病院は国際化を進めている。昨年末、台湾の主要な2つの大学病院と提携し、今年、6月には、提携の準備として、米国のシカゴ市のLoyola大学を訪問した。昨年、12月に、国立ソウル大学病院と定例の合同シンポジウムを開催しており、今も準備に忙しい。

本年10月、国際化の本命とも言える極東ロシアを訪問した。日露関係は、必ずしも蜜月ではないが、医療という政治的な対立から最も遠い領域での交流は、実際には何の影響も受けなかった。訪問は初めてであったが、本当に近くて遠い国であったと思知らされた。極東には700万近い人口があり、広大な地域には医療施設の整備は全く不十分である。しかも、経済レベルは、すでに日本の平均的な収入を上回り、物価も日本と同等か、むしろ高いくらいである。この地域の人々が、十分な医療を受けられないことは看過できない。

ハバロフスク、ウラジオストク、ユジノサハリンスクの3都市を回り、主要な大学、医療機関を訪問し、丁寧で友好的な対応を受けた。ただ、私たちの持たされた事務書類の袋には、しっかり地図入りで「北方領土はわが国固有の領土です」と書かれており、ロシアの連邦政府機関を訪問する際も持たされた。

一方、ロシア連邦の州政府、特に、サハリン州の会議室には、大きなディスプレイがあり、サハリン州は、歯舞、色丹、国後、択捉を含むことを嫌というほど見せ付けられた。さらに、今回の訪問のような公的な訪問では、VISAの発行までかなりの日数がかかり、有効期間も短い。

思えば、当然である。日本とロシアとの間には、まだ、平和条約が締結されていないのである。言い方を変えれば、日本とロシアとの間の交戦状態に関して、完全な合意に基づいた終結になっていないのではないかと感じた。やはり、近くて遠い国である。しかし、この閉塞を解決することができる数少ない力を私たち、医療者は持っているという確信も得た。今後、この関係を実質のあるものにするための準備を開始している。